

「思い」大切にする北中であってほしい

八月三日付の文章で、空き缶がない家庭について書きました。その後、家に空き缶がない生徒は回収の手伝いがあるという方向を執行部が示してくれました。そのおかげで、「アルミ缶を持っていきたくないけど……」という生徒の「思い」が報われました。次のようなケースはどうでしょうか。

一年生のHM君は、今朝七時二十分過ぎに、私の前を通っていきました。その五分後、彼は走って再び私の前にやってきました。

「どうしたの？忘れもの？」

こう尋ねた私に、彼は走りながら答えました。

「アルミ缶を忘れました！」

家が近いこともあって、彼はアルミ缶を取りに帰ったので、私は「ゆっくりでいいよ！気を付けて！」と声をかけ、彼を見送りました。

しばらくして、再び彼がやってきました。しかし、手には何も持っていません。おかしいと思い、私は尋ねました。

「アルミ缶はどうしたの？」

「家にはありませんでした。」

「そうか、ありがとうね。取りに行ってくれたその気もちだけで十分だよ。」

家が近いからできることだと、一言で片づけてはいけません。大切にすべきなのは、アルミ缶回収に対する「思い」があったということ。その「思い」が、たまたま「取りに帰る」という行動に出ただけなのです。

何ごとともそうですが、「思い」があるから行動が生まれま。例えば、がんばらなければならぬと思うから、勉強に力が入ります。勝ちたいと思うから練習に熱が入ります。

「思い」があるから行動が生まれる、全てのボランティアは、そこからスタートしています。

そこで考えたいのは「回収率」。HM君の場合、実際には彼の人柄からすると、家にアルミ缶がなかったことを理由にして言いわけするようには思えません。回収に協力できなかったこと、また、そのためにクラスの回収率を下げってしまったことに責任を感じているのかもしれない。

「思い」のある生徒を、北中はこれからどのように認めていくのでしょうか。また、回収はできなかったけれど、「思い」がある生徒のことを、周りの生徒はどのように考えるのでしょうか。数字では表しきれない「思い」を大切にすることを願っています。

(十月二十九日記)